

故国の便 (2)

立命館大学文学研究科 落合優翼

【第 8 段落】 (92-93 頁)

あるとき私は、高田博厚氏から電話で、志賀直哉・梅原竜三郎の両大家が自動車事故に出会ったことを知った。事故は、イタリアを廻ってパリに着いた翌日に、パリの郊外でおこったのである。幸いにして大きなけがはなかった。梅原氏は、額にかすり傷を負っただけだといって、元気がよかった。志賀さんは——たしかに疲れてみえたけれども、医者の立場から、心配な点はどこにもなかった。高田氏と宿を訪ねた私は、そのことを説明し、休養をすすめ、役にたつことがあれば何でもするからといって、電話番号を残して帰った。私はそのときはじめて梅原氏に会った。志賀直哉その人には、言葉を交わしたのははじめてであったが、いくさの間、水道橋の能楽堂で、何度もその超然として高雅な風貌に接したことがあった。その面立ち、その白髪、その落ちつきは、以来少しも変わっていないと私は思った。事故から数日の後、早くも私たちは、午後の陽ざしの強いシャンゼリゼーの大通りを、話しながら歩いていた。「マンテーニャがおもしろかったね」と志賀さんはいった、「あのキリストの像があるだろう、あのことを小説に書いてみたいと思う……」。日本を出て、まずギリシャとエジプト、それからイタリアの旅は、北部からはじめて南に降ったのである。(マンテーニャのキリスト像は、北部ミラノの美術館にある)。ローマへ着いた頃には、疲れもしたし、「大きな眼をうるませ天を仰いでいる」絵をあまりに沢山見てきたので、もはや「ラファエルなどろくに見る気もなくなった」らしい。そういうところは、私がその風貌と仕事から長い間想像していた志賀直哉その人に他ならなかった。鋭い感受性、的確な言葉、徹底した自我中心主義、または文学的唯我論(ソリプシズム)……穏やかで、傲らず、衒わず、堂々として、シャンゼリゼーの全体とも見事につり合うもの。イタリア文芸復興期でさえも揺さぶることのできなかったこの人物が、シャンゼリゼー程度のところで、右顧左眄するはずがなかったともいえるだろう。周囲を見向きもせず、志賀さんは悠々と話していた、「もうよかった、疲れただけのことだね、いちばんおもしろかったのは、マンテーニャのキリスト像だが……」。

第 51 回加藤周一文庫公開講読会『続羊の歌』を精読する

① 登場人物

・高田博厚¹

彫刻家。石川県の生まれ。高村光太郎に師事。渡仏して、ロダン、ロマン＝ロランらと交際。肖像彫刻に優れる。帰国後は新制作協会に所属。同人誌「白樺」に参加し、文筆でも活躍。明治 33～昭和 62 年（1900～87）

・志賀直哉²

小説家。宮城県生まれ。学習院を経て東大中退。明治 43 年（1910）「白樺」創刊以後、中心作家の一人として「濁った頭」「大津順吉」「清兵衛と瓢箪」などの鋭敏な感覚と強固な自我意識の見られる短編を数多く書いた。大正中期より「城の崎にて」「和解」「焚火」などの自伝的、心境小説的作品をてがけ、芸術と実生活との相剋をのりこえた強いリアリズム文学を樹立、昭和 12 年（1937）には大作「暗夜行路」を完成した。明治 16～昭和 46 年（1883～1971）

・梅原竜三郎³

洋画家。京都府出身。聖護院洋画研究所で浅井忠に学び、渡仏してルノアールに師事。二科会、国画会などに加わり、華麗で躍動感にあふれる作品を発表する。東京芸術大学教授。文化勲章受章。代表作「裸婦扇」「北京秋天」など。明治 21～昭和 61 年（1888～1986）

② 志賀直哉の旅⁴

日付	内容
1952 年 5 月 31 日	日本を出発
6 月 2 日	イタリアのローマに到着

¹ 日本国語大辞典「高田博厚」（ジャパナレッジ）

<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2002029736fcxQgNDL04>

² 日本国語大辞典「志賀直哉」（ジャパナレッジ）

<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=200201d6cbf4zfgLYM9f>

³ 日本国語大辞典「梅原龍三郎」（ジャパナレッジ）

<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2002006ff6de9Wx5Ap5Z>

⁴ 志賀の旅については、『志賀直哉全集』20 巻、岩波書店、2000 年、pp. 198, 203, 206, 207, 214, 219-222。の書簡（書簡番号は、2266, 2275, 2277, 2285, 2289）から作成。

第 51 回加藤周一文庫公開講読会『続羊の歌』を精読する

6 月 2～20 日	ローマ、ナポリ、アッシジ、フィレンツェ、ヴェネツィア、ミラノを旅行
6 月 20 日	フランスのパリに到着
6 月 20～27 日	フランスに滞在
6 月 27 日	スペインに到着

加藤は志賀の旅程について、「日本を出て、まずギリシャとエジプト、それからイタリアの旅は、北部からはじめて南に降ったのである。」と書いていたが、これは加藤の記憶違いか。

・自動車事故

「事故は、イタリアを廻ってパリに着いた翌日に」＝事故は 6 月 21 日に発生か。

【志賀が妻康子に宛てた 6 月 22 日の書簡】

「伊太利でもさうであつたが、巴里に来て自動車の多いには驚いた しかもそれが日本の自動車の倍位の速さで走つてゐる 今ゐるシャンゼリゼーの町など遠くからガイセン門まで広い通りの右側を見渡すと自動車の赤いテールライト（尾燈）が丁度提灯行列のやうに遠くまで続いてゐる、道を横切るのが一仕事だ。⁵」

→志賀はパリを走る自動車の数と速度に驚き、道を横切るのに苦労。

・シャンゼリゼ大通り



フランスの首都パリ西部（第 8 区）の大通り。

長さ 1880 メートル、幅 70 メートル。1664 年にコベールの命により整地が始まり、1709 年シャンゼリゼ（楽園の原の意）と命名され、1724 年シャイヨー（エトアール）の丘まで遊歩道が開かれた⁶。

⁵ 前掲『志賀直哉全集』19 巻、214 頁。

⁶ 高橋正「シャンゼリゼ」『日本大百科全書（ニッポニカ）』（ジャパンナレッジ）
<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000111808>、画像リンク：
<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000111808000101>

第 51 回加藤周一文庫公開講読会『続羊の歌』を精読する

③ 志賀が関心を寄せた絵画作品

- ・『羊の歌』では、志賀はマンテーニャ「死せるキリスト」に感心し、ラファエルの作品には関心を示さなかったと書かれている。

【1952 年 6 月 28 日 志賀直哉発 広津和郎宛書簡⁷】

(前略) マンテニアのミラノにあるキリストの死骸の画、ポッチセリーのヴィーナスの誕生、(フィレンツェ) などいいと思ひ、特にマンテニアには余りの写実に驚きました、大体ルネッサン〔ママ〕及びそれ以後の宗教画は面白くなく、システィーナチャペルのミケランジェロ〔ママ〕なども余り感銘なく、ミケランジェロはダビデの彫刻が矢張り大好きでした、ラファエロは殆ど総て感心せず円の中に描いたマドンナは色が実に美しい〔ママ〕く、これだけをよく思ひました、大体中世以前のプリミチーフを面白く思ひました、(中略) ルネッサンスといふものは美術史で余り持ちあげ過ぎた事は確かだと思ひます、(後略)

- ・志賀は「ヴィーナスの誕生」(1485 年頃)、「死せるキリスト」をよく思い、特に「死せるキリスト」の写実性に驚く。

ミケランジェロの作品では、「ダビデ像」(1501-1504 年)が好きで、システィーナ礼拝堂の壁画には感銘を受けない。

ラファエロの作品は「小椅子の聖母」(1512 年頃)だけ感心。

志賀はルネサンス期以降の宗教絵画を評価していない。



【図】左から順に「ヴィーナスの誕生」「ダビデ像」、「システィーナ礼拝堂の天井画」「小椅子の聖母」⁸

⁷ 同前書、219 頁。

⁸ 引用した画像のリンク一覧。

「ヴィーナスの誕生」(<https://www.uffizi.it/en/artworks/birth-of-venus>)

第 51 回加藤周一文庫公開講読会『続羊の歌』を精読する

→加藤が『羊の歌』に書いている内容とほぼ一致。加藤はこの手紙の内容と似た会話を、志賀と交わしたのだろう。本段落では、志賀が最も感心したマンテーニャとほとんど感心しなかったラファエロが対比される。

→「イタリア文芸復興期でさえも揺さぶることのできなかった」という文章になる。

・ブレラ美術館（イタリア、ミラノ）、『死せるキリスト』（マンテーニャ）



・画像引用元 [Lamentation over the Dead Christ | Pinacoteca di Brera](https://pinacotecabrera.org/en/collezione-online/opere/the-dead-christ-and-three-mourners/)

(pinacotecabrera.org) (制作年：1483 年、サイズ (cm)：68x81⁹)

「ダビデ像」([Michelangelo's David: Admire World's Greatest Sculpture at Accademia Gallery](https://www.museivaticani.va/content/museivaticani/en/collezioni/musei/cappella-sistina.html))

「システィーナ礼拝堂の天井画」

(<https://www.museivaticani.va/content/museivaticani/en/collezioni/musei/cappella-sistina.html>)

「小椅子の聖母」(<https://www.uffizi.it/en/artworks/la-madonna-col-bambino-e-san-giovannino-detta-madonna-della-seggiola>)

⁹ 参照元 <https://pinacotecabrera.org/en/collezione-online/opere/the-dead-christ-and-three-mourners/> (2024 年 10 月 15 日閲覧)

第 51 回加藤周一文庫公開講読会『続羊の歌』を精読する

・アンドレア・マンテーニャ¹⁰

イタリア、ルネサンスの画家。パドバ派、フィレンツェ派、ベネチア派などの影響を受け、北イタリアのルネサンス様式の確立に寄与。パドバ、マントバで活躍し、銅版画にもすぐれた作品を残す。代表作に「死せるキリスト」など。（1431～1506）

④ 加藤による志賀の人物評

- ・加藤は志賀と直接話したことはなかったが、戦時中に水道橋の能楽堂（宝生能楽堂）
【参照：『羊の歌』『青春』】で何度も彼の「超然として高雅な風貌に接し」ていた。また、彼の仕事からもその人となりを感じていた。
→加藤は実際に志賀と言葉を交わすが、志賀は想像していた通りの「鋭い感受性、的確な言葉、徹底した自我中心主義、または文学的唯我論（ソリプシズム）……穏やかで、傲らず、銜わず、堂々として」いる人物であった。更にそのような志賀の態度は「シャンゼリーゼ全体とも見事につり合うもの」とも評価。
- ・「もうよくなった、疲れただけのことだね、いちばんおもしろかったのは、マンテーニャのキリスト像だが……」→パリにいても、志賀はイタリアでみた作品の話を繰り返しており、彼の右顧左眄していない様子や穏やかで堂々としている様が表現。

【第 9・10 段落】（93-94 頁）

私はまた日本放送協会のパリ支局長から頼まれて、旅中に病んだ放送員をコンコルドのそばの宿に訪ねたこともある。オリンピックの実況放送のために、ヘルシンキまで出かけ、そこで病気になった。出かけるまえから、身体の具合はよくなかったらしいが、無理をして出かけたのである。オリンピックが終り、報道関係の仲間とパリまで来て、もはや動けなくなった。行ってみると、病人は思ったより元気そうで、日本人の医者 came ことを、ひどくよろこんだ。そのためだけにでも、来てよかったと私は思った。「この人は」と若い看護婦の方を眼でさして、病人は寝床の上に起きあがるようにしながらいった、「ほんとうに親切にしてくれますが、なにしろ言葉が通じません。日本の方に、こうして

¹⁰ 日本国語大辞典「マンテーニャ」（ジャパンナレッジ）
<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=200203faeb104hln6bY6>

第 51 回加藤周一文庫公開講読会『続羊の歌』を精読する

日本語でお願いできるのが、何より嬉しくて……」日本を発ってから後、何とかして一日も早く帰りたい、とそればかり考えていたという。「おかしいでしょうか。畳の上でもう一度寝られれば、死んでもいいと思いますよ」。——しかしその話を聞き終り、血圧を測ってみると、病人を日本へ送ることは全く問題にならなかった。完備した病院でただちに最善の処置を講じて、しかもその生命を救うことができるかどうかわからない。「畳の上でもう一度寝られれば、死んでもいい……」。相槌をうちながら、それ以上の話をつづけることが、私にはほとんど堪え難かった。翌日また来ることを約して、私は席を起ち、看護婦を部屋のそとへよび出したが、彼女は、心配そうに、声をひそませて病人の状態を訊いた。その訊き方には、誠意が溢れていた。私は手みじかに病気を説明した、「できるだけ早く病院へ移さなければならない。そのための処置は、支局長と相談して私がとる。しかし尿毒症による昏睡状態は、いつ来るかもわからない、今晚であるかもしれない、そのつもりで注意してもらいたい……」「言葉がわからぬから、ゆきとどこかぬことも多いでしょう」とそのときに彼女はいった、「経験も浅いけれど、あなたの指示に従って最善をつくすつもりです」。

それから三日ばかり、病院へ移って後まもなく、不幸な放送員は、昏睡状態におちいって、そのまま亡くなった。

① 「パリ支局長」と「旅中に病んだ放送員」

- ・パリ支局長…^{さきやませいき}崎山正毅（1903-1995）

1928 年東大文学部英文科卒。日本放送協会に勤務、企画関係の部門を担当し、その後編成局次長、大阪中央放送局長、ヨーロッパ総局長や NHK 国際局長などを歴任。訳書に『マンスフィールド短編集』、ジョージ・ムーア著『青年の告白』など¹¹。

- ・放送員…^{わだのぶかた}和田信賢（1912-1952）

日本放送協会が 1934 年に開催した、第一回全国アナウンサー採用試験で採用。1945 年 8 月 15 日の「玉音放送」に関するアナウンスを担当。日本が 16 年ぶりに参加した、

¹¹ 「サキヤマセイキ 崎山正毅」『現代日本人名時点』平凡社、1955 年、318 頁。

第 51 回加藤周一文庫公開講読会『続羊の歌』を精読する

1952 年のヘルシンキオリンピック大会に嘱託として参加。ヘルシンキ行の飛行機の中でも体調が思わしくなく、1952 年 8 月 14 日にパリで客死¹²。

② 和田信賢の治療状況

『羊の歌』での記述

- ・加藤が来るまで和田は、「若い看護婦」に親切に看病してもらうが、言葉が通じない。
和田は日本語で意思疎通できる加藤の来訪を喜ぶ。
- ・和田は日本に帰国することを切望→「昼の上でもう一度寝られれば、死んでもいい」
和田⇄加藤（日本語での意思疎通が可） 和田⇄看護師（日本語での意思疎通が不可）
- ・加藤は「若い看護婦」に誠意を感じており、彼女は言葉が通じなくても、最善をつくそうと努力していた。
- ・和田が残した手紙

【8 月 12 日（第十信）巴里にて（NHK 春日編成局長宛手紙）】

巴里へ着いたときは又々昏冥状態にて飛行場から巴里の旅宿へコロガリコミ寝たつきり、崎山さんの御世話で日本からパスツール研究所に研究に来ている加藤修一〔ママ〕という大秀才の診断で、少し休んだら帰つてよかろうとの事でしたが、どうも食物は小生の事とて全然日本食でなければ駄目だし、遂に二人の仏人医師と加藤博士の言葉で入院することになりまして、何んという病院か知りませんが寝台車で運ばれました。¹³

→二人のフランス人医師と加藤の判断によって、和田の入院が決まる。『羊の歌』ではフランス人医師の存在が省略される。

- ・『羊の歌』では異国人間での医療行為を、和田と「若い看護婦」の関係に集約。

¹² NHK アナウンサー史編集委員会『アナウンサーたちの 70 年』講談社、1992 年、122, 123, 159-161, 418 頁。

¹³ 和田信賢『東京ヘルシンキ巴里』暮らしの手帖社、1952 年、122, 123 頁。また、和田の評伝小説「そうそう そうなんだよ」によると、和田が泊まったホテルは「カンボンホテル」、入院した病院は「メゾン・ド・サンテ病院」とのこと。（山川静夫「そうそう そうなんだよ」『放送文化』(38) 4、1983 年、75-77 頁。）

第 51 回加藤周一文庫公開講読会『続羊の歌』を精読する

- ・和田はフランス人医師の言葉を理解できていたようであり、『羊の歌』で描かれた外国語で意思疎通ができない和田と異なる。

→和田と外国人との間での意思疎通については【第 11 段落】で検討。

【第 11 段落】（94-95 頁）

病院へ移すまで、宿の部屋のなかで、出来ることは少かった。私は、ときどき、親切に病人の世話をしていた看護婦を近所の珈琲店へ息ぬきに誘い出した。そのあわただしい時間に、私と彼女とは、急に親しくなった——と思う。双方が外国人で、たとえ短い間にしても、一人の病人に人間的つながりを感じていたからかもしれない。デンマーク人で、フランス語には慣れていなかったが、流暢な英語を話した。「この病人のあとでは、何をやるつもりか」と私は訊いた。「また別の病人の世話をするでしょう」「どこで？」「多分パリで、でもはっきりわかりません」。私は心のどこかで、彼女がパリで働くだらうことを望んでいた。それで、ある日突然、彼女が「シュヴァイツァー博士をどう思いますか」といい出したときには、一種の衝撃を感じた。「私は現代の聖者だと思う」と彼女はいい、「私は誰も聖者だとは思わない」と私は応じた。「あなたのような人が、そう言うのはおかしい」「あなたのような人？　しかし君は私を知らない」「いいえ、知っています」と彼女はいつて、笑った。「さあ、どうだか」と私はからかうようにいったが、別のことを考えていた。「博士の仕事は助けなければいけないと思います」と彼女はいつた。そのアフリカの密林のなかの病院が、看護婦を募っていて、彼女はそれに応募した、シュヴァイツァー博士自身がパリまで来て、彼女を病院まで連れていってくれるだろう、二年の契約で、博士の病院で働くほどの感激はない、という次第で、眼を輝かせながら語る彼女は、生々として、美しかった。その美しさはほとんど私を当惑させた。私にとっては、アフリカの病院や「聖者」よりも、眼のまえのこのひとりの娘の方が、どれほど大切であったかわからない。私は彼女を美しいと思い、彼女に愛着を覚え、理由が何であろうと、彼女が遠くに去ってしまうことだけを残念に思った。「おまえも運の悪いやつだ、事もあろうに、相手がシュヴァイツァー博士ではどうにもならぬ！」——誰が何を言おうと、そのときの彼女が、出かけざるをえなかったことは、確かである。

① 和田を世話していたデンマーク人の看護婦

- ・【第 9 段落】の「若い看護婦」と本段落のデンマーク人の看護師は、同一人物か

第 51 回加藤周一文庫公開講読会『続羊の歌』を精読する

- ・和田が 8 月 12 日に春日編成局長に宛てた手紙

動けず仕方ないので身の回りの世話に英語のできる看護婦に来てもらいました。とてもいい人です。丁抹人ですから僕の英語ですべて用事が果たせそうです。但し、夜はいないので、淋しいのと心細いのとで東京のことばかり考えています。ホテルからついて貰いました（後略）¹⁴

→デンマーク人は実在し、実際には和田は英語で看護師とコミュニケーションを取る。

- ・山川静夫『そうそうそうなんだよ』（和田信賢の評伝）に同一人物らしき女性が登場。

名前は **Erna Spohr Hansen**（エレナ・シュポーア・ハンセン）。

同書ではエレナが和田の死後に彼の妻に宛てた手紙が全文引用され、エレナはオランダ人であると書かれる¹⁵⇒『羊の歌』・和田の手紙はデンマーク人と記述。

→オランダ人のエレナとデンマーク人の看護婦は同一人物と仮定。以下、デンマーク人の看護婦はエレナと仮称する。

- ・【第 9 段落】…和田とエレナとの間に共通言語がなくコミュニケーションは不成立。

実際は、英語を媒介して和田とエレナの間でコミュニケーションが成立。

他方、入院後には「四方白壁の病室で（中略）入ってくるのは仏人看護婦がわけのわからぬ事をいつて注射していきます。¹⁶」と和田は手紙に書く。

→和田は英語を理解できるが、おそらくフランス語は理解できない。

- ・『羊の歌』でのデンマーク人看護婦（エレナ）の人物造形について

加藤と共に和田の世話をを行ったエレナを基本としつつ、フランス人看護婦（和田が理解できない言語を話す人物）の要素を付け加える。和田と英語でコミュニケーションを取っていた要素が削除される。

効果…エレナの誠意と善意が強調される

¹⁴ 和田（1952）、123, 124 頁。

¹⁵ 前掲山川（1983）、77, 78 頁。

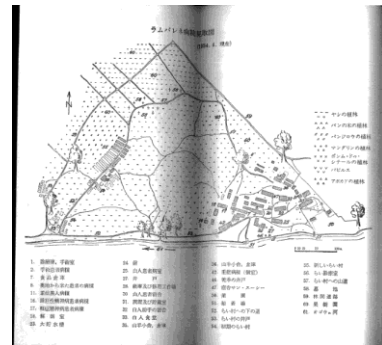
¹⁶ 前掲和田（1952）、124 頁。

第 51 回加藤周一文庫公開講読会『続羊の歌』を精読する

② Albert Schweitzer (1875-1965)

- ・ドイツの神学者、思想家、音楽家、医師。アルザス（当時ドイツ領、現在フランス領）の牧師の家に生まれる。ストラスブール大学で学び 1889 年哲学博士号取得、その後教会副牧師、1900 年神学博士。1905 年以後は、学生時代の献身の決意を実現するため、医学を勉強し 1913 年に医学博士となる。同年にパリ福音伝道会派遣の医師として赤道アフリカのフランス領コンゴ（現ガンボン共和国）のランバレネに赴き、医療事業を開始する。第一次勃発のため捕虜となり事業は挫折するが、戦後に文筆活動や講演、パイプオルガンの演奏によって資金を調達して、1926 年に再度ランバネレに赴き病院を再開し、医療事業を拡張した。第二次世界大戦中もランバレネにとどまり、体力の限界と薬品物資の欠乏をおして医療に専念した。1952 年のノーベル平和賞を 1953 年に受賞¹⁷。

右図：「ランバレネの病院の地図（1954 年 4 月現在）」¹⁸



③ エレナのアフリカ行き

- ・加藤は自身とエレナに、フランスでは共に外国人という共通点や、和田を通して人間的な繋がりを感じた。一方的感情かもしれないが、加藤は彼女と「急に親しくなった——と思」った。

→加藤はエレナがパリに残ることを望むほど、彼女に愛着を覚えていた。

- ・なぜ、シュヴァイツァー博士の名前を聞いて衝撃を感じた？

デンマーク人のエレナがなぜパリの街で、シュヴァイツァー博士の名を出すのか？

→エレナとシュヴァイツァー博士が加藤の中では結びつきづらく、加藤は「衝撃を感じた」のではないかな。

¹⁷ 森田雄三郎「シュヴァイツァー」『日本大百科全書（ニッポニカ）』（ジャパンナレッジ）を参照。<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000113173>

¹⁸ 野村実『人間シュヴァイツェル』岩波新書、1955 年。の同著者が作成した地図を引用。

第 51 回加藤周一文庫公開講読会『続羊の歌』を精読する

・エレナはシュヴァイツァー博士を「現代の聖者」と呼ぶほど、彼に心酔。⇔加藤は「誰も聖者だとは思わない」

・エレナは「眼を輝かせながら」博士の仕事を手伝う意義を語る。加藤は彼女を美しく思い、その美しさに「当惑」した。彼女がシュヴァイツァー博士の仕事を手伝うよりも、自分の近くにいて欲しい思うほど、加藤はエレナに心惹かれる。

ただ一方で、その願いが叶わぬことも理解していた。

【第 12 段落】（95-97 頁）

しかしアフリカへ去って数か月後、彼女からの長い手紙がとどいた。それは現場に着いてすぐに何故手紙を書かなかったか、その後数ヶ月の間に何がおこったか、その間に彼女のなかではどういう心境の変化が生じ、どうしてその長い手紙を書くようになったか、そのすべてを想像させるのに十分なものであった。「パリでの長い会話を思い出してこれを書きます、あなたならばわかってくれるでしょう」という言葉でその手紙は、はじまっていた。パリで会った時のシュヴァイツァー博士は、親切な祖父のような老人であった。しかし密林の病院に着いて後には、博士に会う機会もほとんどなかったということ。博士は忙しくて、病室に現れることも、めったになく、絶えず訪問客があり、今も米国から来た人たちが、映画を撮影するので、そのことにかかりきりであること。病院にはまだX線の機械がないが、それは博士が機械を買うことに反対したからであり、働いている医者たちは必ずしもそのことに満足していない。しかし今では、熱帯の気候にも、病院の仕事にも慣れて、毎日を過ごせるようになっていくということ……「失望」という言葉はどこにも書いてなかったが、聖者の偉業にあらゆる情熱を傾けて協力するために彼女は出かけたので、「仕事に慣れて毎日を過ごす」ために出かけたはずではなかった。そうして遂に不幸な事件がやって来た。「ほんとうによい青年で、もしあなたが彼に会っていたら、あなたも彼を好きになったでしょう」と彼女は書いていた。その青年は理想主義にあふれ、無報酬で病院の建てましのために働いていたという。ところがその仕事の途中で、理由が何であったにしても、青年はシュヴァイツァー博士から追い出された。彼には行くところがない。「私は絶望した彼を何とかして慰めようと思いました、しかしどうしても力が及びませんでした。不幸にして、彼は自殺しました。こんなに悲しいことがあるのでしょうか……」。

第 51 回加藤周一文庫公開講読会『続羊の歌』を精読する

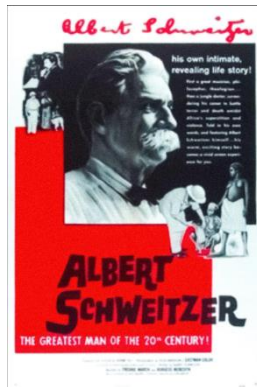
① シュヴァイツァー博士の実態

- ・博士は忙しくて滅多に病室に現れず、アメリカからきた映画撮影にかかりきり。さらに、博士の反対によって病室への X 線機械の導入ができない。

→博士は病人を診察せず、医療環境の整備に反対。にもかかわらず、映画撮影への協力に専念。

- ・エレナは「聖者の偉業」＝「博士の仕事」に協力するためにアフリカに出かけたが、想像していた「博士の仕事」とは異なる現実と直面。彼女は「仕事に慣れて毎日を過ごす」。
- ・「失望」という言葉はどこにも書いてなかったが」…エレナの手紙には「失望」という言葉はなかったが、加藤はその文面から彼女の「失望」の感じたのだろう。
- ・更に「理想主義にあふれ、無報酬で」働いていた青年は、「聖者」だと信じていた博士に追い出されて、自殺してしまい、彼女の心は傷つく。

② アメリカからの映画撮影



- ・おそらく、Jerome Hill (ジェローム・ヒル) 監督
『Albert Schweitzer 』(アメリカ、1957 年公開) の撮影。
同作品は第 30 回アカデミー賞 (1958 年 3 月) で長編映画ドキュメンタリー賞を受賞¹⁹。(左図は同作ポスター²⁰)

【第 13 段落】 (97 頁)

私自身がはじめからどんな「聖者」も信じていなかったことは、まえにもいった。しかし「聖者」を信じていた若い娘を私は信じていた。私は彼女のなかの美しさに敬意を抱いていた。私がそのことを、「人道の英雄」という短編小説に書いたのは、はるか後になっ

¹⁹ THE OFFICIAL ACADEMY AWARDS® DATABASE (<https://awardsdatabase.oscars.org/>) 参照。

²⁰ 画像引用元：<https://www.imdb.com/title/tt0050109/mediaviewer/rm2757858049/>

第 51 回加藤周一文庫公開講読会『続羊の歌』を精読する

てからのことである。意あって言葉が足らなかったためか、その反響は、ただちに、思いがけないところから現れた。私の旧師がその小説をみて激怒している、ということを、私は人づてに聞いた。その人は信頼するに足る旧友であった。しかし私は人を介して知った非難に応えることをしない。旧師は亡くなり、私は遂にその機会を失ってしまった。

① 加藤が見たエレナの美しさ

・加藤はどんな「聖者」も信じていなかったが、エレナのことは信じ、「彼女のなかの美しさ」に敬意を抱いていた。そして、そのことを「人道の英雄」(『文藝』河出書房、1955 年)に書く。

→「彼女のなかの美しさ」…エレナが和田に見せた誠実さ、親切さといった彼女の人柄

「人道の英雄」での記述…「(前略)そして、——どこに疑う余地があろう?——その心もだ。私はそのまえから別の機会に彼女のあたたかい心を知っていた。それは病人に対する親切であった。しかしそれが単に看護婦の職業的なものではないということを感じていた。²¹」

→加藤はエレナがもつ「あたたかい心」を信じ、敬意を抱いていた。

② 「人道の英雄」でのシュヴァイツァー批判

・「羊の歌」と「人道の英雄」での登場人物の対応関係

エレナ⇔ブリジット、青年⇔チェコの青年、シュヴァイツァー博士⇔S 博士

→多少の違いはあるが「人道の英雄」と「羊の歌」での、これら 3 人の人物像など是一致的。(ただし、青年の死はフランス人ジャーナリストによって加藤に伝えられる)

・同作中では、「S 博士は全く独裁者」(p. 242)、「S 愛犬病院」(p. 248)、「私にわからないことは、とにかく彼が人道の英雄であったということ」(p. 255)など書かれ、シュヴァイツァー博士に対する強い批判が行われる。

²¹ 加藤周一「人道の英雄」『加藤周一著作集』13、平凡社、1979 年、222 頁。

第 51 回加藤周一文庫公開講読会『続羊の歌』を精読する

③ 旧師の激怒

・この小説に旧師（東京帝国大学医学部の関係者か？）が激怒していることを、加藤は人づてに聞く。おそらく、シュヴァイツァー博士への批判に激怒か。

→加藤は「人を介して知った非難に応え」ない＝直接の批判にしか応えない

・しかし「旧師は亡くなり、私は遂にその機会を失っ」た＝旧師から直接の批判が届くことはなかった。

【第 14 段落】（97-98 頁）

もしその機会があたえられていたら、私はどういう弁解をしたであろうか。おそらく弁解はしなかったであろう。その代りに、アフリカの病院のことを議論するためには、まずアフリカの黒人たち自身の意見を訊いてみる必要があり、私は現に何人かの黒人に出会ってその話をしているのだ、といったことであろう。また植民地帝国の国民が、植民地において、病院を経営するときには、「聖者」になるよりもまえに、植民地帝国主義そのものに対する見解をはっきりさせる必要があると思う、といったことであろう。そして植民地帝国主義こそは偽善の体系であり、個別的な善意を、その体系からひき離すことが、体系そのものに挑まずにどうして可能であろうかともつけ加えたかもしれない。私はそういう議論を、パリで知らなかったのではない。しかしそういうことをアフリカへ出かけようとする娘にはいわなかった。そういう必要を感じなかったからである。私は、私が愛したかもしれないひとりの娘の心の傷と、伝説的な人物の名声や権威とを、断じて交換しない。

① もし旧師から直接批判がきていたら

・弁解はせずに議論をしたらろう。

① アフリカの病院について議論するならば、そこを利用する「アフリカの黒人」＝被支配層側の意見を聞く必要がある。実際に何人かの黒人と会い話した。

・「人道の英雄」…シュヴァイツァーの病院から来た黒人と会ったことがある「シカゴの黒人歌手」から、黒人の眼にその病院がどう映っているか聞く²²。

²² 前掲「人道の英雄」、246, 247 頁。

第 51 回加藤周一文庫公開講読会『続羊の歌』を精読する

この人物が実在するかは不明だが、おそらくモデルは存在したろう²³。

② 植民地帝国の国民が、植民地で病院経営をする場合、「聖者」になる前に、植民地主義に対する見解をはっきりさせる必要がある。

③ 植民地帝国主義は偽善の体系であり、その体系を破壊しない限り、個別の善意をそこから引き離すことはできない。

- ・「シカゴの黒人歌手」も同様の発言…「人種問題ではなくて、植民地問題です。あすこの人間は、黒人ではなくて植民地の土人だ。ああいう事業は、植民地の体制をこわしてからでないとやってはいけない。²⁴」

→植民地支配体制下で医療行為を行う限り、支配政策の一環となる。

② なぜエレナに植民地支配に関する議論をしなかったのか

- ・【第 11 段落】「誰が何を言おうと、そのときの彼女が、出かけざるをえなかったことは、確かである。」…加藤は、エレナがシュヴァイツァーの仕事を手伝いにアフリカへ行く考えを、誰も変えることはできないと考え、「そういう必要を感じなかった」のではないか。

③ 「ひとりの娘の心の傷」と「伝説的な人物の名声や権威」

- ・【第 11 段落】「アフリカの病院や「聖者」よりも、眼のまえのこのひとりの娘の方が、どれほど大切であったかわからない。」

→加藤にはシュバイツァー博士や彼の仕事よりも、目の前のエレナが大切であった。

- ・シュバイツァー博士の名声や権威を傷つけてでも、エレナのアフリカでの経験を「人道の英雄」にフィクションを交えつつ記す。

→それほどまでに、エレナは加藤にとって大切に心に残る存在であったのではないか。

²³ フランス留学中に、アメリカの黒人詩人と西洋見物について議論したことが書かれる。(加藤周一「続 ある感想—高みの見物について—」『文学』5月号 vol122、1954年、492頁。

²⁴ 前掲「人道の英雄」、247頁。